

年間第 32 主日 (マルコ 12:38-44)

この人は自分の持っている物をすべて入れた



先週、イエス様の時代に掟は最終的に 674 あったと話しましたが、613 の間違いでした。あまりにも細かくなってしまった 613 の掟を、ある人が「無意味 (613)」とバッサリ切ったのを、「虚しい (674)」と誤解していました。

今週の福音朗読後半は、やもめの献金についてでした。イエスは賽銭箱の向かいに座って、一人の貧しいやもめの献金に目を留めました。貧しい人だったから、またやもめだったから目を留めたのではないと思います。その人の心がけを見て、弟子たちにお手本として示したのです。

朗読の最後の部分は、少し説明が必要です。「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた」(12・44) 実は、金持ちたちが何を入れたのか、わざと書いていないのです。「皆は有り余る中から入れた」何を入れたのかここには書かれていません。

これに対して、やもめが何を入れたか強調されて書かれています。「自分の持っている物をすべて、生活費を全部」です。何を入れたのか書かれていないのは、何も入れていないのに等しい献金だったからでしょう。ところがやもめが献げた物は「すべて」「全部」だったわけです。

ここに登場しているやもめは、まずは「神にすべてを委ねることのできる人」と言うことができます。神にすべてを委ねたのだから、神がすべてを計らってください。その絶対の信頼を持っている人です。

さてこの女性は、いったいどこに行けば見つかるのでしょうか。イエス様の時代にさかのぼらないと、出会えないでしょうか。それとも、私たちの身近にいるのでしょうか。たとえばこのミサに参加している人々の中に、神にすべてを委ねることのできる人はいるのでしょうか。

中田神父が「一人だけおられますよ」と言ったら、誰のことを思い浮かべるのでしょうか。周りの人を見渡しますか？一人だけおられますと言ったのは、それはイエス・キリストのことです。祭壇を囲んでミサをささげていますが、祭壇の中心におられるイエス・キリストが、「神にすべてを委ねることのできる人」ではないでしょうか。

父なる神にすべてを委ねたのだから、父なる神がすべてを計らってください。それを完全に理解しているからこそイエスは、「自分の持っている物をすべて」祭壇の上に置くことができるのです。私たちはある程度のおささげはしています。しかしすべてを祭壇に置くわけではありません。それなのに私たちのおささげが尊いものになるのは、自分をすべて祭壇上でささげるイエスがえられるからです。

神学生時代に興味深い話を聞きました。小学生の子どもが、陶器の貯金箱を主任神父様のところに持ってきて、目の前で壊して中身をすべて取り出し、主任神父様にこう言ったそうです。「神父様、これでばあちゃんのためにミサをしてください。ばあちゃんは重い病気で入院して

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

います。大人の人のようにたくさんのお金はないけれども、持っているお金をすべてここに置くので、これをお願いします。」乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた。ステキな話だと思いませんか？

私たちが祭壇で囲んでいるのは、毎週見ているいつものパンとぶどう酒かもしれません。しかしこのパンとぶどう酒を用いて、イエスはご自分をすべてお与えになるのです。私たちはなかなかすべてを祭壇に置くことが出来ませんが、私たちのために、イエスはご自分のすべてを祭壇で献げてくださいます。私たちはそれを見えています。少なくとも毎週、ある人は毎日見ているのです。

私たちが集まる中に、少なくとも一人、自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れてくださる方がおられます。私たちはそれを見て、その方に養われて生きています。イエスに倣って、私たちも人生の中で、ある時期教会のために「賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた」という時期があっても良いのではないのでしょうか。時間や、都合や、祈りに参加すること、家庭で祈ること。人生のあるひとときは、「誰よりもたくさん入れた」そういう時期があっても良いと思います。

11月は死者の月です。先祖のために、墓に行って祈ってください。先祖のため、すべての死者のため、「誰よりもたくさん入れた」そういう月にしてください。福江教会では10日午後3時から墓地ミサです。

年間第33主日(マルコ 13:24-32)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。